

SEINAN CHANTEURS

60TH ANNIVERSARY CONCERT



2014

平成26年度福岡市民芸術祭参加



2014年12月6日(土) 14:00開演
アクロス福岡シンフォニーホール

主催/西南シャントゥール 共催/西南学院・西南学院大学同窓会、西南学院グリークラブOB会
後援/福岡市・(公財)福岡市文化芸術振興財団・福岡市教育委員会・福岡音楽団体連絡会・福岡県合唱連盟・西日本新聞社



西南シャントゥール
会長
的野 恭一

師走の何かとご多忙の折、ご来場を賜り厚く御礼申し上げます。

お蔭様で『創立60周年記念演奏会』を開催できる運びとなりました。

60年と申しますと年齢で云えば還暦を迎えた事になります。この長い間、何度も存続の危機もありましたが、メンバーの合唱への一途な熱い思いが活動を持続させて、現在では60名を超すメンバーで活動できるまでになりました。

これも偏に、長い間のご支援、ご協力を頂いた皆様方のお陰とメンバー一同深く感謝致しております。

同じく今年、九州交響楽団とRKB女声合唱団が創立60周年を迎えられました。共にその創立期に故・石丸寛氏が関与されていますが、氏はまた、西南シャントゥールの母体「西南学院グリークラブ」の戦後の復興に尽力頂いた恩師です。20年前『創立40周年記念演奏会』(サンパレス)で指揮をされた姿が、今でも多くのメンバー

の脳裡に懐かしい思い出として残っています。

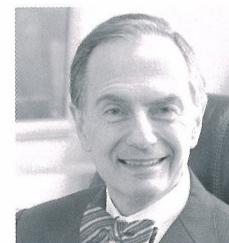
今回は、客演指揮者に須賀敬一先生、伴奏者に木島美紗子先生をお迎えして、高田三郎作曲の男声合唱組曲「水のいのち」と、男声合唱のための「典礼聖歌」を演奏致します。そして、グリークラブOBの80期以降の有志が、多田武彦作曲の男声合唱組曲「尾崎喜八の詩から」を唱い、華を添えてくれます。

最後のステージ「乾杯！」は、現役グリーと東京グリーOB会のメンバーも参加しての総勢90名を超す大合唱となります。ご期待ください。

本日の私達の合唱で、お寛ぎの一時をお過ごし頂ければ幸いです。

尚、今後とも引き続きご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、本演奏会の開催にあたりご協賛下さいました企業各社、並びに共催、後援を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。



西南学院院長
西南学院大学学長
G.W. バークレー



西南学院大学同窓会
会長
末吉 規雄



西南学院グリークラブOB会
会長
河野 正海

西南シャントゥール創立60周年記念演奏会のご盛会を心からお祝い申しあげます。
西南学院グリークラブ(1919年設立)のOBによって、1954年に創立された西南シャントゥールは、今年で創立60周年を迎えます。現役時代に数多くの賞を受賞したメンバーによって構成されていることもあり、設立時に開催された合唱コンクールでは、全国大会に西部代表として出場することになり、見事3位入賞を果たし、話題となりました。

その後も、定期演奏会だけでなく、クリスマスコンサートも開催するなど、青春時代と変わらず、合唱を通じた友情を続けながら、活動を続けてきました。皆さんもご存知のように、西南シャントゥールの歌声は、私たち聴く者の心に響き若き日々を思い起こさせるものがあります。

本日の西南シャントゥール創立60周年記念演奏会では、日々の練習の成果をお聞きいただいくとともに、現役時代を彷彿とさせる歌声をお楽しみいただきたいと思います。

最後になりましたが、2016年に100周年を迎える西南学院とともに西南シャントゥールが今後益々発展することを祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

貴団創立60周年の慶事をお迎えになられました由、まことにおめでとうござります。

母校ならびに本学同窓会活動におかれまして、これまで数多くの場面でご出演していただき、素晴らしい力強い歌声を届けていただきておりますことに感謝申し上げます。

私自身が、現在福岡商工会議所会頭職を拝命しておりますことから、なかなか全てに足を運ぶことが叶いませんが、同窓生のみの男声合唱団として毎年定期演奏会などを開催され、西南ブランドの向上に寄与されてことを耳にする度に、団員ご一同様のご努力とご精励の成果によるものとご推察申し上げております。

母校西南学院は二年後(平成26年)に創立100周年を迎えますが、その記念事業の一環として東京での特別公演も企画されておられますことを承知しております。同窓会としても公演への支援と成功を祈っております。

今後とも一層のご奮励、ご躍進のほどを心からお祈り申し上げます。

本日はお忙しい中、西南シャントゥール創立60周年記念第37回定期演奏会にご来場いただき有難うございます。

また、本日の演奏会は、私共が嘗て学んだ西南学院大学の母体である西南学院が2016年に創立100周年を迎えるに当つての祝賀記念演奏会を兼ねさせて頂きました。

アメリカ南部バプテスト系の西南学院は1916年の創立以来、特に先の大戦の中で直面した幾多の苦難を乗り越えて今日の姿を築いてきました。

そして、西南シャントゥールの母体である西南学院グリークラブが、学院創立に遅れること3年の1919年に結成され、学院の歴史と共に歩んできたことを思えば、西南学院グリークラブ無しに西南学院を語る事は出来ないとも言えましょう。

合唱王国福岡を支えてきた西南の合唱は、いつの時代も福岡の、九州の合唱愛好家に支えられてきました。西南シャントゥール創立60周年そして西南学院創立100周年を機に、改めて西南学院の音楽に対し地域社会の皆様の温かいご声援を賜りますよう心からお願い申し上げます。



合唱指揮者
須賀 敬一

創立60周年、石丸 寛・福永陽一郎という巨星に導かれた60名を擁するOB男声合唱団、西南シャントール。記念の演奏会に迎えて頂きました。しかも「典礼聖歌」と「水のいのち」をというのです。

かつて作曲者の指揮で歌った典礼聖歌に導かれ、それまでの職業を捨てて牧界に転じた浅野繁政さんがそのために再入学したのが西南学院の神学科でした。病に倒れ牧師としての生涯を終えられたのですが、その信仰にあふれる典礼聖歌の詩編唱はまさに絶唱でした。

高田先生ご帰天後、私は教会で声と祈りを合わせる信徒たちの聖歌とはもうひとつのもの、音楽として作品と演奏の真価が問われるもの、コンサートホールで典礼聖歌の演奏を志して来ました。日本人による日本人のための日本語の聖歌、あるいは宗教曲。今度は、今度こそ、そのために用意された合唱団が西南シャントールだと思っています。

1964年に発表された「水のいのち」、出版楽譜は300版を数える国民的合唱曲です。多くの人々が心と声を合わせる合唱という行為に相応しい、そのテーマの嚆矢とも言うべき合唱曲。名作が誕生して50年、この1年に果して何回演奏されたことでしょうか。その掉尾を飾る演奏でありたいと願っています。

作曲家／多田 武彦

西南シャントール創立60周年記念演奏会の開催を、心より、お祝い申し上げる。

1945年の終戦後の数年は、戦災後の焼野原の中での食糧難・インフレによる物価の暴騰・電力不足による停電などが続いたが、日本の多くの音楽愛好の学生達に、潤いと激励を与えてくれたのは男声合唱曲であった。

1950年に京都大学に入学したその年から、京大男声合唱団の学生指揮者を命ぜられた私も、名演奏団体を求めて関西学院グリークラブや同志社グリークラブの名演奏を聴くうち、九州の雄・西南学院グリークラブの事を知り、福岡や演奏旅行の行われる都市に出掛けては、西南学院グリークラブの清澄な音楽に酔い痴れた。

京大卒業後は銀行に就職、超繁忙の融資業務に追いやられ、合唱指揮活動は不可能になったが、恩師・清水脩先生(故人)の指示に従い、日曜作家のつもりで男声合唱組曲を書き続けた。

西南シャントールからも新作の委嘱を頂いた。1993年には「柳河風俗詩・第二」を、1996年には「三崎のうた・第二」を、2010年には「中也の雨衣」の男声合唱組曲を作曲した。何れも西南シャントールによる名初演がおこなわれた。

ここ十数年の間、心ある諸先生方は「他の多くの合唱団と違って西南シャントールは、永年の正統派的演奏力の上に、『西洋音楽演奏に必要な、軟口蓋共鳴を遵守する』『自分勝手に歌わないで、歌いながら団内の音楽に聞き耳を立て、一糸乱れぬアンサンブルを作る』『枝葉末節に捉われない、骨太の演奏を展開する』などに、一段の飛躍が見られるようになった」と称賛する。

末筆ながら演奏会のご成功と、今後益々のご隆昌をお祈りする。



福岡県合唱連盟
福岡音楽団体連絡会
顧問
香月ハルカ

栄えある60周年の金字塔

創立60周年、心からお祝い申し上げます。母校、西南学院の創立100周年を2年後に控え、年々充実した活動を展開されており、12月初旬恒例の定期演奏会は、必ず福岡シンフォニーホールが満席になるという名物コンサートになっています。

戦後、福岡が合唱王国といわれていた良き時代にその中核をなす合唱団の一つであった西南学院グリークラブで歌っていたメンバーが中心となって創立された西南シャントール、現在では大学のOB男声合唱団としては全国でも貴重な存在といえますが、60年という道程は決して平坦なものではありませんでした。メンバー諸兄の情熱と撓みない努力を原動力に卓越した指導力と音楽性を持ったリーダーのもと、大学OB団体ならではの強い団結力が發揮されて、栄えある60周年の金字塔を打ち建てられました。同年にスタートしたRKB女声合唱団で永年歌い続けてきた私は、共に歩んだ歳月に想いをめぐらせ、胸を熱くしています。

本日は、関西合唱界の重鎮であり、高田三郎先生の愛弟子として高名な須賀敬一先生を客演指揮に迎えられ、名曲「水のいのち」をメインに格調高い作品が並び、男声合唱特有の深々と味わいのあるハーモニーが、シンフォニーホールに響き渡ることでしょう。

これからも福岡合唱界の大先輩として、益々意気盛んに豊かな歌声を発信し続けて下さい。ご発展をお祈り申しあげます。



福岡県合唱連盟
理事長
岩崎 洋一

記念演奏会によせて

西南シャントールの歌声は、男声合唱独特な響きが60年の重みをもって伝わってきます。今回の記念演奏会では、高田三郎、多田武彦両氏の作品が歌われますが、演奏される「典礼聖歌」は高田先生の指揮で聴いたことがあるのですが、今回は、須賀敬一先生を客演指揮に男声合唱で歌われるとの事、男声合唱の響きが楽しみです。西南シャントールの存在は、現役の西南グリークラブから繋がっており、学生たちが合唱連盟のコンクールで全国レベルの演奏をしてきた時代を経て、西南シャントールの演奏会へも一緒にステージに乗っていたことも思い出します。また、男声合唱の定番になっている「いざ起て戦人よ」は、西南グリーからはじまり、全国で歌われ始めたと伺っています。合唱文化をつないできた男声のロマンをこれからも歌い継いでいかれることを願っています。素敵な演奏会になることを念じつつ、第60回記念演奏会おめでとうございます。



福岡音楽団体連絡会
会長
石川 純一

西南シャントール創立60周年によせて

西南シャントール創立60周年記念演奏会の開催、誠におめでとうございます。1954年4月に結成されたと伺っておりますが、私が勤めておりました九州交響楽団の第1回定期演奏会に遅れること半年、シャントールの創立にも故石丸寛氏(九響初代常任指揮者・音楽監督)が関わってあったようです。

合唱団として長年運営を続けてこられたことは、大変なご苦労もあったと思います。先日60周年記念演奏会を開催したRKB女声合唱団とともに、福岡の合唱ひいては音楽界をリードしていただいている。

福岡音楽団体連絡会(音団連)にも加盟いただき、市民芸術祭での音団連合同演奏会、加盟オーケストラの合唱曲、音団連加盟合唱団が中心になっている團伊玖磨作曲:組曲「筑紫讃歌」にも参加いただいています。

また元シャントール代表故徳永麟之助氏には第2代代表に就任いただき、音団連の発展にご尽力いただきました。

平均年齢が70歳と伺いましたが、西南学院グリークラブの若い卒業生の方々がもっと入団され、平均年齢を下げ、これからも70年、100年と、活動されますことを祈っています。

ご 祝 辞



RKB女声合唱団
代表
内野 美保子



合唱指揮者
大庭 寻子



西南プリエール
指揮者
野口 儀

“創立60周年おめでとうございます。”

西南シャントゥールは、同じ時に60周年を迎えた、RKB女声合唱団にとっては、お兄様のような合唱団です。

10月2日、アクロス福岡シンフォニーホールで開催しました「RKB女声合唱団60周年記念演奏会」を始め、節目節目の演奏会には、いつもご協力頂き、大変感謝致しております。

毎年、定期演奏会を開催され、アクロス福岡シンフォニーホールを「シャントゥール」ファンで満員にされている事、合唱団を運営している者としては、羨ましいし、本当に頭が下がります。

2008年の定期演奏会にはゲスト出演させて頂き有難うございました。又、定期演奏会にお誘い頂けるのを期待しております。

今後も70周年、80周年と益々ご活躍されるのを楽しみしております。

西南シャントゥール創立60周年、おめでとうございます。

西南シャントゥールの皆様とは今や親戚関係のように思わせていただいている私にとりまして、この60周年のお祝いはずっしりとした重みと共にこの上ない喜びを感じております。

皆様との思い出はたくさんあります。グリーンヒルコール&フラウエンコール南の女声合唱団合同で2回、そしてNHK福岡児童合唱団MIRAIで2回、定期演奏会に賛助出演させていただきました。今年の1月にはNHK福岡児童合唱団MIRAIが『九州市民大学』で一緒にさせていただきました。練習場に何度も足を運び、歌や振付の練習をしました。孫のような子どもが「おじいちゃん、私のやる通りにすればいいとよ！」の言葉に微笑みながら汗をかきかき一生懸命練習を重ねて下さいました。世代を超えた歌声は多くの方々の心に響いたことをお聞きしました。

打ち上げにも毎回参加させていただき、これまでの歩みが順風満帆ではなかったこと、自分の身を削って引っ張ってこられた熱い想いが幾つもあったことを知り、耳元で歌われる男声合唱の響きの深さに涙したこともありました。青春時代の熱い絆があったからこそ、そしてメンバーのお一人お一人がこの西南シャントゥールを愛してやまなかつたからこそその今があるのです。

みなさん、これからも元気に歌い、輝き、この歴史と伝統を引継ぎ、守って攻めていることを祈っています。親戚のおばちゃんはこれからもずっと応援しています。

『西南シャントゥール創立60周年』おめでとうございます。

私共「西南プリエール」はシャントゥールさん創立から遅れる事約30年。西南学院創立70周年時に西南OB、OGで合唱を行ったのを機に、故森川和子先生（元西南学院大学教授）のご意志を偲び結成されました。まだまだ拙い合唱団でしたが、設立当初よりシャントゥールさんには数々のステージにお誘い頂き、順調に活動を始める事ができました。初めてのステージは、故徳永麟之助氏の傘寿のお祝いのコンサートでした。駆け出しの女声合唱団にも拘らず、お声掛け下さり勇気づけられ感謝一杯でした。

一口に「60年」と申しますが、きっと山坂もおりだった事と思います。以前、的野会長から「テノール3人だけ……なんかの練習もあったよ…」と伺った事があります。区切りの年に、先輩方の御苦労を、そして又新しい世代への橋渡しを記念するのは本当に大事だと思います。メンバーお一人お一人にとってこの演奏会が心に残る素晴らしい時となります様、心より祈念致して居ります。

嬉野でのジョイントコンサート、温泉、宴会、懐かしく思い出しつつ……。

プロフィール



客演指揮／須賀 敬一 *Suka Keiichi*

早田大学理工学部卒、在学中は早大グリークラブ学生指揮者。磯部倣、高田三郎の両氏に師事。1962年より1998年まで豊中混声合唱団の常任指揮者・音楽監督として内外の現代曲を中心に意欲的な活動をした。この間、大阪府合唱連盟理事長、関西合唱連盟理事長、全日本合唱連盟常務理事、日本合唱指揮者協会監事などを歴任。師である磯部倣からはその最晩年、自ら指導する「いそべとし男声合唱団」の後事を託され、豊中時代16年間にわたりて客演を乞うた高田三郎の作品演奏ではスペシャリストの一人とも称されている。現在も女声アンサンブル アトリエ、大阪メールクワイア、いそべとし記念男声合唱団、新居浜混声合唱団等をはじめ多くの合唱団を指揮、指導を続けている。全日本合唱連盟名誉会員、関西合唱連盟最高顧問など。



オルガン・ピアノ／木島 美紗子 *Kijima Misako*

大阪音楽大学ピアノ科卒業。在学中より関西二期会のピアニストを10年間務める。朝比奈隆指揮大フィルと共演。大阪、東京、名古屋などで高田三郎氏の伴奏者を務め、イスラエル・ローマ・ヴァチカンの演奏会に同行。1996年から6回、ウイーンのムジーク・フェラインでの演奏会に出演。2004年、ローマとパレストリーナ市へ演奏旅行。

2010年、アシジ・ヴァチカン、サン・ピエトロ大聖堂・ローマのサンタ・チェチリア音楽院のコンサートで演奏。豊中混声合唱団、東海メールクワイア、リヒトクライス(東京)など合唱団との共演が多い。カトリック教会オルガニスト。



ピアノ／水崎 玄 *Mizusaki Gen*

福岡市に生まれ、5歳よりピアノをはじめる。1991年、第15回PTNA F級地区本選第1位で全国大会に出場。1994年、福岡第一高等学校芸術科音楽コース卒業。1999年、東京音楽大学卒業。

東京音楽大学卒業演奏会に出演。第1回九州音楽コンクール大学の部で金賞受賞。2002年、マルティヌー弦楽四重奏団と共に演奏。

ドイツのザクセンアンハルト州において、インターナショナルピアノマスターコースを受講し、F.W.シュヌア氏に師事。ピアノを 田中美江・村上隆・徳丸聰子の各氏に師事。現在、福岡にて演奏活動や後進の指導にあたっている。

クラリネット2人とピアノのトリオ「Tre Nera」で活動中。様々なジャンルを演奏するバンド「LIBERTA」で活動中。「日本音楽家ユニオン」所属。

女声合唱団「コール・エスボワール」常任伴奏。

西日本短期大学非常勤講師・純真短期大学非常勤講師・ミュージックステーション福岡講師。



指揮／徳永和彦 *Tokunaga Kazuhiko*

福岡高等学校在学中合唱部に所属、指揮を担当。1961年西南学院大学商学部卒業。

在学中、西南学院グリークラブ創立40周年記念演奏会にて学生指揮を担当。1997年委嘱作品、多田武彦作曲：男声合唱組曲「三崎のうた・第二」、又、2012年委嘱作品、多田武彦作曲：男声合唱組曲「中也の雨衣」を初演。1996年より西南シャントゥール指揮者。

バリトン／久世 安俊 *Kuse Yasutoshi*

福岡教育大学音楽科(声楽)卒業。同大学院修了。
北里由布子、三浦國彦、平和孝嗣、柴山昌宣の各氏に師事。
これまでに、オペラ「フィガロの結婚」、「コシ・ファン・トゥッテ」、「愛の妙薬」、「秘密の結婚」、「魔笛」、「カブレーイティとモンテッキ」、「ラ・ボエーム」、「カルメン」、「ヘンゼルとグレーテル」、「泣いた赤鬼」、「花さかじいさん」、「バスティアンとバステイエンヌ」等に出演。
2009釜山芸術祭「歌曲とアリアの夜」で釜山市立交響楽団と共に演じた。
バッハ「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「口短調ミサ曲」「クリスマスオラトリオ」「カンタータ」、ヘンデル「メサイア」、モーツアルト「レクイエム」、フォーレ「レクイエム」のソリストを務める他、合唱指揮者としても活躍。
現在、近畿大学九州短期大学准教授。西日本オペラ協会理事長。
RKB女声合唱団指揮者。福岡ゾリスト会員。西南シャントゥール、ヴォイストレーナー。

ソプラノ／永渕 くにか *Nagafuchi Kunika*

長崎西高校、活水女子大学音楽学部声楽学科首席卒業後、ウィーン留学。福岡教育大学大学院修了。
文化庁による「学校への芸術家派遣事業」オペラで各地を巡演、オペラ「ヘンゼルとグレーテル」(グレーテル)、「コシ・ファン・トゥッテ」(デスピーナ)、「愛の妙薬」(アディーナ)、去る10月には「カブレーイティとモンテッキ」(ジュリエッタ)にアクロス福岡において出演(演奏:九州交響楽団)。また、アクロス福岡「子どものためのオペラ」にも「泣いた赤鬼」(娘)「花咲かじいさん」(ポチ)「羊飼いと狼」(農民)として6年連続出演中。
一昨年は韓国釜山にて釜山芸術祭フィナーレ公演に唯一の日本人として出演し、釜山交響楽団と共に演じた。
福岡市民芸術祭50周年記念祭オープニング公演オペレッタ「こうもり」ハイライト(演奏:九州交響楽団)において公募オーディションによりアーデーレ役で出演。
宗教曲においてもアクロス福岡にてモーツアルト「レクイエム」、ヘンデル「メサイア」ソプラノソリストを務める。
西日本オペラ協会会員。福岡ゾリスト会員。九州女子大学・短期大学非常勤講師。長崎西高同窓会コーラス指揮者。

ナビゲーター／原田 徹 *Harada Tohru*

NHK福岡放送局シニアアナウンサー。
1978年(昭和53年)西南学院大学法學部法律学科卒。アナウンスメント研究会。
同年、難関を突破してNHK入局。同期のアナウンサーは他に10人。
アナウンサー生活のおよそ半分は、スポーツアナウンサーとして仕事をし、野球では甲子園の高校野球からプロ野球・ダイエーホークス(現ソフトバンク)の実況放送などを担当しました。
その他、陸上、駅伝、マラソン、剣道、ボウリング、ラグビー、サッカー、チアリーディング、レスリングなど、幅広い種目での実況放送を担当しました。
スポーツの第一線を退いた後は、海外中継や海外口の機会が多く、タイ(1993年)、カンボジア(2003年)からのラジオ生放送の他、アイルランドロケ(1994年)では、リポーターとしてアラン諸島のイニシア島に3週間滞在し、総合テレビ「はるばると世界旅~妖精が微笑んだ島~」として全国放送されました。

東京ラジオセンター勤務時代の2007年6月には、オーストラリア・メルボルンから「地球ラジオ」の公開生放送を2日間(計4時間)行い、東京～メルボルン間8,300キロをエコノミーディスクワントで3往復、メインディレクターとして提案・企画・立案・構成・実施を一人で務めました。

また、大晦日の「ゆく年くる年」の放送では、奈良局時代(3年連続)、福岡局に転勤した年と、4年連続で担当。視聴率70%～80%というプレッシャーの中、ナレーションを担当しました。

福岡放送局には3度勤務した関係で、「博多祇園山笠」の追い山中継ではメインの棧敷席担当を4回(1996年、2002年、2003年、2004年)担当しました。

2013年7月で60歳定年を迎えたが、8月からも引き続きシニアアナウンサーとして、福岡県をはじめ九州沖縄の皆さんにニュースをお届けする毎日を送りながら、総合デスクとして、福岡局14人のアナウンサー・5人の女性キャスターの勤務調整、九州沖縄各局アナウンス(60人)との連絡など、忙しい毎日を送っています。

出 演 者 (卒業年次順)

1st Tenor	2nd Tenor	Baritone	Bass
宮地 基次	刀根 亨一	中辻 浩一	木道 昇
阿部 昌弘	的野 恒一	和田 正義	田中 義信
高木 正志	大石 宏	鈴木 勸	靄 喜廣
中尾 武史	野辺 和馬	森山 剛	平田 大三郎
日高 良公	徳永 和彦	石川 和義	八尋 一雄
飛松 智明	一柳 隆治	篠崎 詔二	佐藤 忠芳
宮城 研二	下田 昭	森 博彦	蓮尾 勝右
平塚 郁男	佐藤 宗一	佐藤 棟也	波多野 勝彦
今野 哲郎	黒江 量二	松尾 淳郎	毛利 正明
山元 一憲	徳永 武雄	山下 博英	夏秋 毅昭
坂部 雅夫	石松 茂	小西 真二	武藤 新
倉地 進	山本 武裕	里中 健	八尋 憲二
大司 真	高川 弘幸	中嶋 恒生	角 正信
杉本 哲也	窪田 敏博	梶原 博司	中垣 登
	眞鍋 敬介	伊德 諭	岩崎 嘉範
	山下 悅朗	山下 雅壽	宮地 純
	砥上 雅壽		福田 誠司

<西南学院グリークラブOB会：第3ステージ出演>

本山 和文 宮崎 和善

<西南学院グリークラブ東京OB会：第4ステージ出演>

堀米 能文	田中 穂積	森 猛	中野 裕之
木下 俊彦	古瀬 哲也	樋口 一法	岡 潔
岡田 和夫	村上 正道	緒方 良英	邑本 真司
徳永 正章			
西田 正則			
石丸 貴康			

<西南学院グリークラブ現役：第4ステージ出演>

荒川 修太郎	中島 秀治	殿崎 裕樹	田尻 尚紀
南 陽介	村上 航平	中尾 健	疋田 仁
山口 謙	竹若 広之	武藤 葵	大山 淳樹
安田 善樹	松尾 有記	泉 昂史郎	

予告

西南シャントゥール 第38回定期演奏会

2015年12月5日(土)・アクロス福岡シンフォニーホール

先行予約指定席券 2015年8月1日受付開始

この先行予約では座席指定券を発行致します。良いお席はお早めに!
尚、別紙アンケート用紙に、お差し支えなければ、お名前、ご住所をご記入下さい。
後日、演奏内容及びご予約方法をご案内致します。

*チケット・センターでの販売は10月中旬より行います。(座席指定券発行)
*その他の方法でお求めのチケットは一般自由席となります。



[I 部]

yell : Ah Seinan !

作詞/Alma O'Norean Graves・作曲/石丸 寛

I. 男声合唱のための典礼聖歌

作曲/高田三郎
編曲/須賀敬一

- 天よ露をしたたらせ
- 天は神の栄光を語り
- いつくしみと愛 (Ubi Caritas)
- やみに住む民は光を見た
- 愛の讃歌
- 来なさい 重荷を負うもの

指揮: 須賀 敬一
オルガン: 木島美紗子

II. 《贊助》西南グリーOBメンバーズ'80～

男声合唱組曲『尾崎喜八の詩から』

作詩/尾崎喜八
作曲/多田武彦
指揮: 井手敏彦

- 冬野
- 最後の雪に
- 春愁
- 天上沢
- 牧場
- かけす

— 休憩 —



[II 部]

III. 男声合唱組曲『水のいのち』

作詩/高野喜久雄
作曲/高田 三郎

- 雨
- 水たまり
- 川
- 海
- 海よ

指揮: 須賀 敬一
ピアノ: 木島美紗子

IV. 乾杯！－「男声合唱のための酒の歌」より－

編曲/源田俊一郎

指揮: 徳永和彦
ピアノ: 水崎 玄

- Ein Prosit (さあ乾杯) ドイツ民謡
- 北酒場 なかにし礼/詞・中村泰士/曲
- 黒田節 福岡県民謡
- 乾杯の歌 ヴェルディ/曲
ソプラノ: 永渕くにか バリトン: 久世安俊
- 春の小川 高野辰之/詩・林柳波/改・岡野貞一/曲
- 酒と泪と男と女 川島英五/詞・曲
- 乾杯 長渕 剛/詞・曲

《特別寄稿》

I 男声合唱のための典礼聖歌

元・東海メールクワイア団員
片山和弘

高田三郎が神への奉仕と自らの信仰の証しとして、後半生のおよそ38年間をその作曲に捧げた「典礼聖歌」は、カトリック教会のミサ（典礼）で用いられる教会音楽で、そのことばのほとんどが聖書からとられている。以前は世界のどこでも、ミサはラテン語で執り行われるが如きが歌われていた。それが、第二ヴァチカン公會議（1962-65年）以降、各国の自国語でも行うことができるようになったことから、日本では司教団からの委嘱を神からの指名と受けとめた高田三郎が、日本語による歌唱ミサ式次第の一式を始め、年間を通して行われるミサにも対応出来るだけの、およそ220曲もの典礼聖歌を作曲した。自國語による聖歌がこれだけ整備された国は、まだ世界のどこにもない。

作曲に際して高田三郎は、それが西洋からの借り物ではない心からの日本の祈りとなる様に、最高の祈りの音楽とされるグレゴリオ聖歌の精神と、日本の伝統音楽の旋法的、旋律的特徴を取り入れ融け合わせることで、それまで日本にはなかった新しい音楽を創造したのである。その功績に対して1992年、時のローマ法王、ヨハネ・パウロ二世より「聖シルベストロ騎士団長勲章」が授与された。

一方、典礼聖歌は高い精神性と音楽性を有する秀れた合唱曲として、1970年代から一般合唱団にもとりあげられるようになった。

男声典礼聖歌は1990年12月、須賀敬一編曲・指揮、大阪経済大学グリークラブ演奏により初演された。

2001年6月、東海メールクワイア（名古屋）から楽譜が出版されて男声典礼聖歌は全国に広がり、今や男声合唱の重要なレパートリーとして歌われている。

『音楽は、音楽のためにあるのではない。祈るためにある』（高田三郎）

1. 〈天よ露をしたたらせ〉 待降節の入祭の歌
イザヤ45-8 詩編72-3・6

救い主キリストの誕生を心静かに待ち望む精神が美しく力強く歌われる。

待降節はクリスマス（降誕祭）を迎える前の準備期間（約4週間）で、この時期のシンボルカラーである紫色の花・ラベンダーの香りのように、心をゆったりと落ち着かせる歌。

2. 〈天は神の栄光を語り〉

詩編19-2・3 4・5 6・7

旧約時代の名も無き詩人の、不可思議な神秘への畏怖と、人智を超えた偉大な存在への贊美。

ドイツロマン派の詩人シラーは「星の彼方に創造主は住んでいるに違いない」と謳った。有名なオラトリオ「天地創造」（ハイドン）にも同じ詩編19が使われています。

3. 〈いつくしみと愛〉（ウビ・カリタス）

グレゴリオ聖歌では、聖木曜日、洗足式のあと歌われる〈ウビ・カリタス〉としてよく知られている。

いつくしみと愛さえあればどんなところにでも神と共に在る喜びと幸福がある。「私があなた達を愛したように、あなた達も互いに愛し合ひなさい」何げない日々の営みの中にキリストのことばを刻む。

4. 〈やみに住む民は光を見た〉 降誕節の入祭の歌
ルカ2-11・14・17

天使からキリスト生誕を知られた羊飼いたちの驚きと喜び。キリストは世の闇を照らす光。「神に榮光」と救い主誕生の喜びと感謝を高らかに、そして「人に平和」と安らかな心の平安を穏やかに歌い納める。その余韻がいかにも味わい深い、降誕節にふさわしい品位ある喜びの歌です。

5. 〈愛の贊歌〉 Iコリント13-1~8
使徒パウロがコリントの教会に宛てた手紙の中で愛が主題となっている最も格調高い有名な贊歌。結婚式でよく歌われる。

「愛は決して滅びない。信仰と希望と愛。その中でもっとも大きいものは愛である。」と聖パウロが言う愛は並大抵のものではない本当の愛。前半はかたり口調で、後半は6/8拍子の流麗な旋律にのせて本当の愛の姿が清新に歌われている。

6. 〈来なさい重荷を負うもの〉

マタイ11-28~30

作曲に3年を費やしたといわれる名曲中の名典礼聖歌は、高田三郎が指揮する最後の曲になりました。

『キリストの心のやさしさをいただいて歌いましょう。皆さんも一人のとき、この歌を静かにうたつてみて下さい。繰り返し繰り返しうたつてみて下さい。負っている荷物が重ければ重いほど、キリストの招きのおことばが胸にしみると思います。』（高田三郎・典礼聖歌を作曲して より）

天よ露を したたらせ

典礼聖歌編集部 詞

天よ 露を したたらせ
雲よ 正義を 降らせよ
大地を 開いて救い主を 生み
正義の花を 咲かせよ
牧場に 降りる 露のように
地を 潤す 雨のように
王は 来る 王は 来る
民に 平和を もたらす為に

天は神の栄光を語り

典礼聖歌編集部 詞

(答) 天は神の栄光を語り
大空はみ手の業を告げる

- 1 天は神の栄光を語り
大空はみ手の業を告げる
日は日に言葉を語り継ぎ
夜は夜に知識を伝える
- 2 言葉でもなく話でもなく
その声も聞こえないが
その響きは地をおおい その知らせは世界に及ぶ
神は天に太陽の幕屋を据えられた
- 3 太陽は花婿のようにすまいを出て
勇士のようにその道を喜び走る
天の果てから姿を現し その果てまで巡り行き
夜のすまいへの道を辿る

いつくしみと愛

典礼聖歌編集部 詞

(答) 慈しみと愛があればどこにでも
神はそこに共にいる

- 1 キリストの愛に結ばれ
その喜びを分かちあい
おしみなく仕えあおう
心から神をたたえて
- 2 わけへだてをとり除き
ねたみと争いを退け
輪をひろげて進みゆこう
主を囲むひとつの輪を
- 3 光り輝くキリストを
素顔のままに仰ぎみる
尽きぬ喜び限りなく
世々とこしえにアーメン

やみに住む民は光を見た

典礼聖歌編集部 詞

闇に住む民は 光を見た
ダビデの町に 生まれた幼子
すべての人を 救う恵み
すべての民に およぶ喜び
神に榮光 人に平和

世界よ 神を称え歌え
神は来られた 告げよ 知らせよ
すべての国に その救いを
すべての民に 不思議なわざを
神に榮光 人に平和

愛の讃歌

典礼聖歌編集部 詞

たとえ人と天使のことばを話しても
愛がなければなるどらのよう
また預言する力を持ち
すべての知識に通じていても
山を移すほどの深い信仰をもっていても
愛がなければ無にひとしい
また持っている物をすべて施し
からだを焼かれるために渡しても
愛がなければ空しい
愛は心ひろく情けあつく
愛はねたまらず高ぶらない
礼にそむかず利を求めず
憤らず恨みを抱かず
不正を喜ばず真実を喜び
すべてを包み
すべてを信じすべてを希望しすべてを忍ぶ
愛はいつまでも絶えることがない

来なさい 重荷を負うもの

高田三郎 詞

来なさい重荷を負うもの
苦しむものはみな私のもとに
私はあなたを休ませる

私は柔軟で謙遜だから
受けなさい私のくびきを
なりなさい私の弟子に

私のくびきは負いやすく
私の荷は軽いからあなたの心は安らかになる

II 男声合唱組曲「尾崎喜八の詩から」

「自然と心から語り合える詩を歌い出すこと」それが尾崎喜八の全生命であると言われるほど、その詩は健康な自然と、そこに晴れやかに生きている人間を歌っている。この組曲は尾崎喜八の自由詩に基づく音楽的絵画の陳列で、各曲間の連携は無い。しかし、一つ一つの作品の中に特色を出してみた。何度も読み返しても飽きない良い詩だったので、久しぶりにさらっと書けた。

(作曲家 多田武彦)

1. 「冬野」

妻の実家のある千葉・三里塚付近の冬の夕景色を歌った作品。終戦直後の身心共に疲弊した中で麦の種をまく詩人。翌年には必ず実るであろう麦の収穫を思い、毎年変わらずに繰り返す自然の営みを讃え、感謝する心境を歌っている。自然に対する喜八の溢れるような感受性の豊かさが自由詩の中の言葉一つ一つに凝縮されていて、それを多田武彦が澄み切って明るくかつシャープな音楽表現で作曲している。

2. 「最後の雪に」

東京・高井戸に新居を構え、畑を耕したり花を栽培したり、鶏を飼育しながら文学に打ち込んでいた喜八29歳時の作品。この詩に書かれている「水や船や労働を織り込んだ生氣の詩」は、横浜・磯子の河口で見た風景や労働者の姿を歌った詩「河口の船着」のこと、詩人としてスタートしたばかりの尾崎喜八の詩作人生に対する気負いの感じられる作品。

3. 「春愁」

一ゆくりなく八木重吉の詩碑の立つ田舎を通って—との副題がついたこの作品は、戦後7年間の富士見村での生活を終え東京に戻ってきた尾崎喜八60歳頃の作品。還暦を迎えた喜八は、自分の今の満ち足りた境地を受け入れつつも、青春時代から現在に至るまでに想いを馳せながら、来し方の惜しみや悔やまれる思いなどを「春愁」という言葉に込めて歌っている。

4. 「天上沢」

山を愛した尾崎喜八は当然信州の山々にも足を踏み入れている。北アルプスの燕(つばくろ)岳から南西へ大天井岳、西岳を抜け槍ヶ岳へ続く2,500m級の尾根は「表銀座」と呼ばれ、山の愛好家には人気の縦走ルートである。天上沢とは槍ヶ岳と西岳の北斜面にある沢で、夏でも雪が残りその眺めはとても美しい。天上沢を見つめながら追憶に涙を浮べる老人の姿に、喜八自身も自分の思いを蘇らせていている。

5. 「牧場」

喜八50歳頃の作品。蓼科の北側、小諸の南部に広がる御牧ヶ原の情景。雲は尾崎喜八が物心ついた頃から生涯を通して一番の好奇心の対象だった。山の牧場のすがすがしい空気の中、夏の終わりの少し寂しい気配を感じながら牛と一緒に日がな一日、流れていく雲を飽きずに眺めている詩人の姿が目に浮かぶ。多田武彦はゆったり流れるような旋律でその情景を見事に表現している。

6. 「かけす」

この詩については尾崎喜八自身が「自注 富士見高原詩集」の中で述べているので、それを引用する。

「秋もようやく深くなると、日に幾たびか、空の高みをカケスの群れが南の方へ飛んでゆく。南のどこへ行くのかは知らないが、とにかくこの高原を後にして、今まで一諸に暮らしてきた私たちを後にして、われわれの知らない土地へ行ってしまう。私にはそれが寂しかった。ふだんより遙かに高いあんな空を飛んでいくのだから胸の痛む思いがする。誰がどういう訳でカケスと呼んだか語源の程は知らないが、とにかくにもその名前で呼ばれて、自分でもその気になっていたかも知れないものが、どうにも出来ない本能か運命のようなものに導かれて、恐らくは半ば心を残しながら遠くに去って行くのだと思うと、私には彼らが単なる鳥としては見られない。むしろ何か靈的なものに見えてくる。」

《賛助出演》西南グリーOBメンバーズ'80～

西南グリーOBメンバーズ'80～。西南学院大学、というよりは「西南学院グリークラブ」を1980年以降に卒業したOBを中心としたメンバーで構成されています。

西南学院グリークラブOBの合唱団と言えば、唯一本日創立60周年を迎えた「西南シャントゥール」が永年にわたり数少ない一般社会人男声合唱団として活動してきました。今回のメンバーの中にもシャントゥールで活躍している仲間もいますが、多くの仲間は卒業後、福岡の地を離れたり、仕事や家庭、地域の活動などで「男声」合唱から遠ざかっていました。

5年前、西南学院グリークラブ創立90周年を期して開催された「グリークラブ・フェスティバル」に海外をはじめ、全国各地から300名ものOBが参集し、一緒に歌ったときに、「やはり男声合唱をやりたい」、「昔の仲間たちと西南グリーの歌声を再現したい」という声が上がり、翌年の「西南シャントゥール」の定期演奏会で歌う機会を得ました。

早いものであれから4年。今回の西南グリーOBメンバーズ'80～のメンバーは前回と一部入れ替わっていますが、西南グリーを、そして男声合唱を愛する思いは変わっていません。今回も東京OB会だけでなく、九州・山口の各地、海外から仲間が集まりました。月に2回の練習。それさえもなかなか全員が集まるることは難しく、東京OB会の仲間と一緒に練習できるのは演奏会直前のみ、という厳しい練習環境ではありますが、指揮者の井手敏彦氏、そしてメンバーの情熱で、少しでも学生時代の歌声を再現でき、皆様に男声合唱の魅力をお伝えすることができれば幸いです。



指揮／井手 敏彦 Ide Toshihiko

長崎県波佐見町出身、昭和58年(1983年)西南学院大学経済学部卒業。兄が西南学院グリークラブ出身で、小学校5年生の時に聴いた兄達の合唱に衝撃を受け、グリークラブに入部するために進学は迷わず西南学院大学へ。2年生で副指揮者兼セカンドテナーのパートリーダーを任せられ、3年の冬、正指揮者に就任、第2回アメリカ演奏旅行を成功させる。

卒業後、郷里に帰り小学校教師として就職。ほぼ同時期に地元の児童合唱団を任される。次いで男声合唱団「オールドダックス」、「波佐見混声合唱団」も引き受け、この3つの合唱団とは20数年指導を続けている。

学生時代から作曲家 多田武彦氏の作品をこよなく愛し、「オールドダックス」の演奏会には必ず多田武彦氏の作品を演奏する。4年前の西南シャントゥール演奏会で賛助出演した「西南グリーOBメンバーズ'80～」のステージでも指揮し、今後若手の指導者として期待されている。

1st Tenor	2nd Tenor	Baritone	Bass
渡辺 秀樹(82)	井手 敏彦(83)	伊徳 諭(80)	磯貝 豊(80)
中竹 茂美(83)	時枝 典生(83)	谷野 繢(80)	岩崎 嘉範(80)
中野 克彦(87)	宮崎 和善(91)	坂田 浩(83)	野間 利博(81)
藤島 整(88)	磯元 孝史(92)	三原 淳司(85)	宮地 純(83)
城 保之亮(89)	篠原 隆盛(92)	四季 正次(86)	綾部 武利(85)
藤尾 拓也(92)	原 裕一(92)	藤 寿(86)	福田 誠司(85)
大山 輝久(94)	小田 泰資(93)	藤本伊久磨(86)	杉岡 勝(92)
内田 圭一(95)	田町 大輔(94)	伊飼 康史(89)	<東京OB会>
野田 誠一(96)	諸熊 敏明(95)	二井 利成(96)	中野 裕之(81)
	<東京OB会>	日下部一徳(96)	黒田 宏(03)
木下 俊彦(80)	<東京OB会>	野口龍太郎(04)	岡 潔(86)
岡田 和夫(81)	田中 穂積(85)	<東京OB会>	邑本 真司(89)
徳永 正章(89)	古瀬 哲也(86)	保家 大司(86)	<特別参加>
西田 正則(91)	村上 正道(87)	緒方 良英(88)	井手 輝実(74)
石丸 貴康(93)	<特別参加>	<特別参加>	
	山元 一憲(70)	森 猛(62)	
	堀米 能文(78)	樋口 一法(75)	(卒年・期)

《特別寄稿》

III 男声合唱組曲「水のいのち」

元・東海メールクワイア団員
片山和弘

『日本では事を決めるのに自分ではなく、他者に決めてもらうことが多い。音楽などは作曲も演奏もほとんど欧米における評判によって決まっているようだ。しかしこの「水のいのち」の評価については、はっきり日本人自身が決めてくれた。これは私にとっても、日本人全体にとってもうれしいことと思うのである。

この「水のいのち」を、これらの楽章の配列から「水の一生」と考える人が多いようである。英訳すれば“*The Life of Water*”である。しかし私は、この題の本当の訳は「*The Soul of Water*」と思っている。*〈中略〉*そして、水の「魂・(Soul)」とは、低い方へ流れていく性質のことではなくて、反対に“水たまり”は「空を映そうとし」「川」は「空にこがれるいのち」なのであって、それはまた私たちの「いのち」でもあり、この組曲の主題でもあるのだ。』(高田三郎“來し方”より)

TBS放送の委嘱により作曲。1964年11月放送初演(混声)されその年の芸術祭奨励賞受賞。女声は1966年11月、男声は1972年4月に初演。

初演から50年。楽譜の通算重刷数累計305刷(混133、女118、男54、2014年10月現在)は他曲に例がない。近年海外での演奏機会が増え、2004年1月にはイタリア語版が出版された。又、オーケストラ伴奏による数百人規模の大編成合唱も生誕百年(2013年)を機にしばしば開かれている。来年3月、ベルリンフィルハーモニーホールで「水のいのち」とベートーヴェン“第九”による演奏会が予定されている。指揮は荒谷俊治、没後15年になる恩師への何よりの追悼である。

1.<雨>

高田音楽の精髓、深い祈りのうたである。

高田三郎は敬虔なカトリック信者。高野喜久雄はキリスト教徒ではないが、超越者の存在をことばで問いかけた詩人。二人は共に天上に超越者をみている。

雨は大いなる者の意志として、すべての者の上に分けへだてなく降る。すべてがあるべき姿にかえるようにと。

平和の始まりである許し。聖書にある「一日のうちに7の70倍許せ」その心をもってなお許せぬ者、その上にこそ“雨よ降れ”と祈る、自分の為ではなく、それらすべての者の為に祈る大きな愛をうたう。

2.<水たまり>

そこやここ、くぼみに泥水が溜まった、どこにでもある水たまりは、どこへも動けずにやがて消え失せてしまうしかない誠に儂い、しかし健気でささやかな存在。ひとの命も水たまりと同じ、やはり儂い。

けれど、その泥水は澄もうとして必死に高い青空を映している。私達も水たまりのように、人と人とのつながりの中で、より清らかにと願いながら儂いひとときの命を懸命に生きているのではないか。

3.<川>

「川」は自らに問いかけ、自らが答える、ことばで人生を考え続けて一生を生きた作曲家と詩人の、命についての人生問答。“ひとりの対話”である。自分を責め、自分に問うことは何よりも苦しく厳しい。しかしそれが無くては自分の存在は無い。

生は常に死に向かっている。矛盾や不条理ではなく、川は空と海、二つの逆方向への焦がれの間で魚や石、様々な形の愛を身ごもりながらその命を生きている。人もまた……。

高田三郎はその“焦がれ生きる”ことを命としていとおしみ、美しい旋律でこの曲を結んでいる。

4.<海>

高田三郎、の小さい頃から親しみ憧れた海への想い。その光景がフランス印象派を思わせる明るい響きの中に描写される。

海にも高野、高田に共通のイメージがある。母と死、そして命である。

打ち寄せる波がそのように聞こえる“みなさい　これを見なさい”は母が子を叱っているようであり、“充ち足りた死”は岸辺に打ち上げられた貝殻、いのちの甦りであろうか。

川は空に憧れながらも海を指して下へと流れた。ひとは老いつつ時を遡り、そして母の胎内に宿る。

《海に入りて 生まれかはらう 龍月》(虚子)

5.<海よ>

“母よ”とも呼びかけたい海。すべてを受け容れ、そのいのちを甦らせる神秘の海、聖なる海への贊歌。しかしその海もまた、くらげやひとでなど憧れを抱きながら“水のいのち”を生きる者である。

「のぼれ のぼりゆけ」、大いなる者のもとへ帰ろうとする私の魂の叫び、祈りである。

いのちの始まりである水は、雨として私達に贈られた“いのち”であった。生かされた一生を生きて今、大いなる者のもとへその命を返そうとする。「降りしきれ 雨よ」と祈ったように、「のぼれ のぼりゆけ」と祈りながら、大いなる者のもとへ帰りゆくのである。

1 雨

降りしきれ 雨よ
降りしきれ
すべて
立ちすくむものの上に
また
横たわるもの上に

降りしきれ 雨よ
降りしきれ
すべて
許しあうものの上に
また
許しあえぬものの上に

降りしきれ 雨よ
わけへだてなく
涸れた井戸
踏まれた芝生
こと切れた梢
なお ふみ絶える根に

降りしきれ
そして 立ちかえらせよ
井戸を井戸に
庭を庭に
木立を木立に
土を土に

おお すべてを
そのものに
そのものにて

2 水たまり

わだちの くぼみ
そのの ここ
くぼみにたまる
水たまり
流れるすべも めあてもなくて
ただ
だまって
たまるほかはない
どこにでもある 水たまり
やがて
消え失せてゆく
水たまり

わたしたちの深さ
それは泥の深さ
わたしたちの言葉
それは泥の言葉
泥のちぎり
泥のうなづき
泥のまどい

だが
わたしたちにも

いのちはないか
空に向う
いのちはないか
あお水たまりの にごった水が
空を うつそうとする
ささやかな
けれどもいちばないのちはないのか

うつした空の
青さのよう
澄もう と苦しむ
小さなこころ
うつした空の
高さのままに
在ろう と苦しむ
小さなこころ

3 川

何故 さかのぼれないか
何故 低い方へゆくほかはないか

よどむ淵 くるめく渦のいらだち
まこと 川は川にこがれ
きりたつ峰にこがれるいのち
空の高みにこがれるいのち

山にこがれて 石をみごもり
空にこがれて 魚をみごもる
さからう石は 山の形
さかのぼる魚は 空を耐える

だが やはり 下へ下へと
ゆくほかはない 川の流れ

おお 川は何か
川は何かと問うことを止めよ
わたしたちもまた
同じ石を 同じ魚を みごもるもの
川のこがれを こがれ生きるもの

4 海

空をうつそうとして
波一つなく 凪ぐこともある
岩と混じれなくて
ひねもす
たけり狂うこともある

しかし
凡ての川はみな
そなたをさして常に流れた
底に沈むべきものは沈め
空にかえすべきものは
空にかえた
人でさえ 行けなくなれば
そなたを さしてゆく
そなたの中の 一人の母をさしてゆく

そして そなたは
時経てから 充ち足りた死を
そっと岸辺にうち上げる
みなさい
これを 見なさい と云いたげに

5 海よ

ありとある 苺
よごれ 疲はれてた水
受け容れて
すべて 受け容れて
つねに あたらしくよみがえる
海の 不可思議

休みない 汀
波の指 白い指 くりかえし
うまざ くりかえし
億の砂 億の小石を
数えつづける
海の 不可思議

くらげは 海の月
ひとでは 海の星
海螢 海の馬 空にこがれ
あこや貝は 光を抱いている

そして 深く暗い 海の底では
下から上へ
まこと 下から上へ
雪は
白い雪は 降りしきる

おお 海よ
たえまい 始まりよ
あふれるに みえて
あふれる ことはなく
終るかに みえて
終ることもなく
億年の むかしも いまも
そなたは
いつも 始まりだ
おお 空へ
空の高みへの 始まりなのだ

のぼれ のぼりゆけ
そなた 水のこがれ
そなた 水のいのちよ

たどえ 己の重さに
逆いきれず
雲となり
また ふたたび降るとしても

のぼれ のぼりゆけ
みえない つばさ
いちばな つばさ あるかぎり
のぼれ のぼりゆけ
おお

IV 「乾杯！」

—男声合唱のための酒の歌「アルコール名曲集」源田俊一郎編曲より—

歌い続けて60年、存続の危機を乗り超え、男声合唱の魅力に取りつかれ、皆さんのご支援を頂き「還暦」を迎えました。古今、東西、祝い事にはお酒はつきもの、不謹慎を免じて頂き選曲を致しました。そして、常々ご指導頂き、また広くご活躍をされておられます、久世安俊・永済くにか両先生に、ステージに花を添えて頂きました。

東京から駆けつけたグリーOB・現役学生グリークラブの諸君を交え、ダイナミックな？「男声合唱」演歌もお楽しみください。

1. 「Ein Prosit」 ドイツ民謡

ビールの本場、ドイツで最も有名な「乾杯ソング」で、ビール祭「オクトーバーフェスト」などでビールの乾杯時に歌われる曲です。

オクトーバーフェスト(oktoberfest)とは、毎年ドイツのミュンヘン(バイエルン州)で開かれる世界最大規模のビール祭、9月下旬～10月上旬に開催されています。

2. 「北酒場」 なかにし礼作詞・中村泰士作曲

皆様もよくご承知の、細川たかしの出世曲。

演歌の世界では、ともすれば暗くなりがちな「北」、「酒場」のイメージを、カントリー&ウエスタン的なポップな乗りのある曲に仕上げています。

3. 「黒田節」 福岡県民謡

「酒の歌」と言えば何はさておきこの曲でしょうか？

4. 「乾杯の歌」

ヴェルディのオペラ「椿姫」第1幕で歌われる有名な曲。青年貴族アルフレードの歌に、高級娼婦ヴィオレッタが加わり、二人のデュエット、それにコーラスが唱和し劇的な盛り上がりを見せます。

アルフレード役を久世さんに、ヴィオレッタ役を永済さんにおねがいしました。

5. 「春の小川」 高野辰之作詞・岡野貞一作曲

“なんでこれが酒の歌？”とご不審の向きも、こじ付けがましいですが・・・・。
「咲け（酒！）よ咲け（酒！）よと、ささやきながら」・・・（笑って頂いて結構です）

6. 「酒と泪と男と女」

フォーク・シンガー河島英五の代表作。清酒のCMソングに採りあげられ爆発的にヒットしました。しみじみと民心を歌う内容が深い共感を呼んだ曲です。

残念なことに河島英五は2001年に48歳で亡くなられました。

7. 「乾杯」

長瀬剛の大ヒット作。酒そのものとはあまり関係ありませんが、結婚式などで良く歌われるお馴染の曲です。

メンバーもそれぞれの過ぎ去った青春の日々を重ね合わせ乍ら、熱唱します。

(カワイ楽譜曲目解説より一部参照 指揮者・徳永和彦)

Grain & Pet Care Communication



MORIMITSU

株式会社森光商店

〒841-8611 佐賀県鳥栖市藤木町字若桜9-7
PHONE. 0942-85-1125(代) FAX. 0942-83-8868